

## 折々の記 No154 : 現実主義への思い切った舵を切るべし！

(H22/6/7 記)

政権交代から 8 ヶ月、迷走に迷走を重ね、国民の期待が大きすぎたが故にその反動も大きく、一気に内閣支持率も急落し、思わぬ短命内閣になってしまった。これも当初危惧されたように、政権は現実に立脚しなければ存立し得ないことを立証した。昨年政権交代直後の折々の記 No145 「民主よ、虎変せよ！」で民主党に対する要望を幾つか述べたが、結局その何れをも彼らは実現出来なかった。自滅したと云えよう。



145 号記述の項目は以下の通りであった。

- 『① 今暫くの猶予を与えるべし！
- ② 第二自民党になるな！
- ③ 解党的出直しを！
- ④ 虎変せよ！
- ⑤ 小選挙区制は日本人の体質に合致していない！』

先見の明を誇る積りはないが、お坊ちゃん政治、ばら撒き政治、現実無視の外交・安全保障政策の限界極まりである。某氏が述べていたが、政権交代しても手をつけていけないのが、2 つあって、1 つは、外交・安全保障政策であり、他は財政規律だそうだ。革命があったのであれば、全てをそれらをも革めることも許されるが、法的手続きに則って政権交代したのであれば、財政規律はともかく外交安全保障政策の大幅な変更は許されない。

そもそも鳩山氏は常時駐留なき安保を標榜もしており、国外・最低でも県外は案外本音だったのだろう。

さて、菅氏を首班とする新政権である。強い指導力への期待と政治と金へのクリーンさに対する期待が想像以上に大きいようだ。唯、気になるのは、菅氏が副総理でありながら首相を支えなかった責めは負わねばなるまい。その様な人物にこの国を任せて良いのだろうか。

第二に、普天間問題をはじめとする外交や・安全保障に対する氏の見識が明示されていない。外交・安全保障に関して現実的な政策を遂行し得るのか、疑問なしとはしない。社民党を外した状態からの出発だからかなり現実的な政策遂行が出来るとは思わぬでもないが・・・。然し、党内には依然として外交・防衛に関して大きなギャップがある。更に問題は、首相自身が如何なる信条を持っているのか不明確であり、不安感を拭えない。党内に安全保障等に関する異論を内包する新政権が、その安保政策を統一すべく、果敢に挑戦するのであれば、まだしも、臭いものに蓋をする状況を継続すれば、何れ行き詰まるのではないだろうか？

本当に政権能力があるのか、試されている。新首相並びに民主党が、偉大な現実主義者へと豹変又は虎変すれば、自民党の体たらくさもあり、意外に長続きするのも知れない。

それにしても、普天間基地移設に関連して、まるで在日米軍がばい菌であるかの如くに、我が方(県や市町村)に来ないでほしいというように、殆どの自治体や国民が米軍を忌み嫌っている、或いはそのような意見をマスコミが余りにも流布させて居る。煽っているのとは思えない。ただ一人、大阪府の橋下知事のみが、受入に前向きとも受け取れる発言をしているのみである。国家全体という大局に立って判断をして貰いたいものである。米国は、在日米軍をばい菌の如くに忌避する日本国民の心情をどのように思うのだろうか？米国の若者の血を日本防衛のために流すことに躊躇するのではないだろうか？それを憂える論調が聴かれないのは寂しい。